

「和」の心

おどり・伝統文化を通して伝えてきたこと

花柳 和 西原和総合舞踊研究所 日本舞踊「和の会」主宰
和光大学非常勤講師

1——はじめに——花柳和自身について

1. 日本舞踊花柳流入門から修業時代まで

私は9歳から57年間、日本舞踊の道を生きてまいりました。最近では年齢を重ねて身体が利かず、「できなくなった踊り」もあります。若い頃に80過ぎの先生から「踊りが分かったなと思う頃には身体が動かないんだよ。だから若い時は思う存分踊ったほうがいいよ」というお話をうかがったことを思い出しております。しかし逆に、年を重ねて益々、踊りはなぜこんなに楽しいんだろうと感じることも多くあります。今回のシンポジウムのテーマのように、踊りを通して子どもを育むことや和の心を伝えることについて、こころばらくずっと考えておりましたので、本日参加させていただきますことは、私にとって大変嬉しいことです。

「子どもを育む」というテーマを受けて、あらためて、私が9歳で日本舞踊の道へ入門した時から、家族同様に、またはそれ以上に、師匠や先輩の方々が私を育ててくださったという実感を抱いています。私がこれからお話することは全て、私自身が師匠や先輩方から受け継いできたことです。そして、それが私の弟子に、そしてそのまた弟子へと伝わっていくことがまさしく伝統文化の良さではないかと考えております。さらに、このような伝統文化特有の「型」を堅苦しいと考えてしまうのではなく、型の中で遊ぶ、型があるから面白いということを教育の現場で子ども達にも学生さん達にも伝えてきました。ですから、まずは私自身の舞踊の道のりをみなさんにお伝えしながら話を進めていきたいと思えます。

幼少期の私は、父の大きい下駄をトッシューズに見立てて道路で一人で踊り、近所の方が「あらお上手ね」と言ってくださって喜んでいるような子どもでした。それを父母も見てくれていたようで、こんなに踊りが好きだったらと踊りを習わ



せてくれたのです。母が後年に私に伝えてくれたことによれば、バレエか日本舞踊かの選択については、「日本舞踊の方が80、90歳の先生が現役で踊られているのだから、長い年月楽しめるだろう」という理由で、日本舞踊の方を選んでくれたそうです。

たまたま私が通っていた小学校（日本女子大学附属豊明小学校）のある目白に子ども達がたくさん通っているお稽古場があり、入門させていただくことになりました¹⁾。6歳の6月6日が芸事の始まりにいいと言われておりますので、私は既に9歳でしたけれど、6月6日に入門させていただきました。その時、最初に教えていただいたのが「声に出してしっかりご挨拶をする」ということで、いまだに印象に残っております。学生さん達にも、入門してくださるお弟子さん達にも、幼稚園の子ども達にも、「挨拶がまずうまくいけばその日は本当に晴れやかで素敵な一日が過ごせるのよ」と、声に出してしっかりとご挨拶をするということを大事に伝えるようにしてきました。

師匠のもと、挨拶から始まった修業時代は長く続きました。玄関の靴やトイレのスリッパをきちんと並べること、使った後の手洗い場をきれいにしておくことなど日常の細かなことを一つずつ習いました。思い返してみると、教えていただいた事細かいことは、全て、まず何より他人への気配りに関することで、相手の方にこの行動は失礼ではないだろうか、相手の方が心地よく感じるにはどうしたらよいだろうか、ということだったのです。

18歳になった時、突然、師匠から「来週から小さい子ども達に代稽古をしなさい」と言われました。そして、レコードを使わずに「口三味線」でやるように言われました。歌詞を歌って三味線の部分も言いながら教えなさいということでした。来週からと急に言われて、一週間でどう準備したらよいものかと迷っているうちにその日が来まして、恐る恐る子どもさん達と一緒にやりました。

伝える立場になってみると、師匠がどう教えていたのかということについて見落としていたことが山ほどあることが判明し、「何を今まで見てきたのか」と。なぜ、師匠と同じようにできないのかと。私達の世界では「守破離^{しゅぱり}」ということばがありまして、「守」はお手本通りに守り通す、「破」はそこから発展していく、「離」は離れるというのではなく自分のものにするという意味としてとらえております。修業時代は、まさに「守」、師匠と同じように徹底的に真似をするという時期であったにもかかわらず、代稽古として人に伝えるとなった時に同じようなことができない自分を発見してしまい、その時、私は「これはもう一遍自分の師匠のやり方を見届けなければいけないんだな」と悟りました。それでも師匠はくじけずに、私に「教え方」を教えてくださいました。代稽古を通して、この子

1) 花柳千代師の許に入門。花柳千代師は、目白に舞踊研究所を開設。門弟の指導、日本舞踊の基礎の研究に取り組み、日本舞踊の国内外への紹介・普及をライフワークとし、「日本舞踊の基礎」を創案。

にこういうふうによったら伝わらないとか、この子ができるためにはどの位置に立たねばならないとか、それはそれは細かく必要な技術について、あらためて長い時間をかけて勉強させていただきました。また、同じ頃、教えるだけではなく、自身が舞台に立った時の方法論も細かく教えていただき、教えることと自分自身が舞踊家として表現技術を習得していくことがつながっていきました。

2. 「和の会」の門下生の育成、舞踊教育・地域教育の現場へ

修業時代を経まして、いよいよ自分で稽古場を開き自分の弟子を持とうという決意をいたしました。昭和50（1975）年、花柳和舞踊研究所を設立し、舞踊の道で生きていこうという覚悟が定まった30代はじめの頃、私は様々なご縁をいただき、教育の現場にも関わるようになりました。

昭和48（1973）年、宮城教育大学で講義を担当させていただくことになりまして、活発な学生さん達と充実した時間を過ごしました。そこで、音楽評論家の園部三郎先生という方に出会い、多大な影響を受けました。園部先生は『下手でもいい音楽の好きな子どもを』²⁾という本を残された有名な方です。当時は、仕事場が新宿にありまして、音楽教育に関わる方はもちろん、政治評論家や物理学者まで色々な方が集まって、芸術論や政治論など話題は豊富でした。園部先生は手を悪くされていたものですから、何人かの方々と一緒に、口述筆記をさせていただくことになりました。それはとうとう5年間続き、本当にたくさんのことを教えていただきました。

そして、昭和50（1975）年、栃木県的那須みふじ幼稚園が開園するということで、「子ども達に何か日本的なものの基本を保育の中で伝えてもらいたい」と舞踊講師として私を呼んでくださいました。初代園長の熱い想いに打たれて同うことになりましたが、まずは「毎週栃木県まで通えるのかしら」と不安に思いながら始まったのが29歳の時、それは今も続いております。

さらに、昭和51（1976）年、舞踊教育界の先駆者として有名な松本千代栄先生（現:お茶の水女子大学名誉教授）が、宮城教育大学での私の授業をご存知だったようで、お茶の水女子大学にも是非とお声をかけていただきました。お茶の水女子大学では、舞踊教育を専門に学ぶ学生さん達が対象で、主にモダンダンスの授業に取り組んでいる彼女らに、半期だけでも日本舞踊を取り入れたいと私を呼んでくださいましたので、まずは、日本の動きや着物の文化を徹底的に体感してもらうことにこだわって取り組んできました。ここでは、舞踊教育を担う多くの学生さん達に出会い、昨年の定年まで36年間務めさせていただきました。

現在は和光大学、聖心女子大学の授業を担当しております。他に単年度や集中

2) 園部三郎（1975）『下手でもいい音楽の好きな子どもを』、音楽之友社。

などの授業ではありますが、早稲田大学、慶應義塾大学、上越教育大学、淑徳文化専門学校にも伺わせていただき、多くの学生さん達との出逢いを得ました。

このように舞踊教育に携ってきたことを振り返ってみますと、幼稚園と大学という現場に赴き、幼児と大学生という年代の違う人達に同時に関わってこられたのは、幸運だったと思います。毎週、大学生には幼稚園の子ども達の様子をもとにして、将来教育者としてまたは一人の親として大人として子ども達に伝えて欲しいことを話しましたし、幼稚園の子ども達にも、常に現代の若者としての大学生の姿を感じながら、大人になっても覚えておいてねと切実な想いで伝えてきました。

この時期は、幼稚園や大学などで教えることが増えてきたことで、「自分自身の踊りは？」と不安にかられ、自分自身も習う時間をたくさん作らねばならないと感じ始めました。今度は男の先生にお習いすることになり³⁾、男の先生と女の先生の踊りのとらえ方の違いを動きで感じながら、舞台を通して一生懸命に稽古をさせていただきました。いつも先生は「踊りは生き物、今感じたように、練習通りだけでは緊張感がみなぎらない」と話してくださいます。たとえば、もう幕が開いて舞台に出る寸前というときに、先生が「和、あそこ^{かす}のところをこう変えて」と急に言われたことがありました。私はもうまさに出ようとしている時で、「あっ、はい」と返事はしたものの、考える間もなくそのまま舞台へと出ました。しかし、後で考えると、まさにその場所に緊張感を与えるという刺激的なことだったのかもしれない。その頃は、とにかくよく練習しました。那須の幼稚園にいくときも帰りに先生のお宅に寄ってお稽古をつけていただくため、小道具を持って行きました。その当時は上野から特急ひばりに乗って行きました。若さというのはすばらしいものだったと感じています。

また、最近では、稽古場のある武蔵野市の地域教育にも関わる機会を得て、武蔵野市の土曜学校「おどり教室」では地域に根付く伝統文化を目指して取り組んできました。また、武蔵野市立幼稚園にもうかがいまして、園児や先生方と実りある交流をさせていただきました。さらには、日本女子大学附属豊明小学校、成蹊小学校等の小学校で「和から学ぶ」と題した特別授業を担当させていただきました。このような実践の中で、子ども達、そして保護者や先生方の反応を受け、さらに学校や地域の教育現場で、日本舞踊や伝統文化を通して伝えるべきことの重要性について考えるようになりました。

3) 昭和56(1981)年から花柳琢兵衛師に師事。花柳琢兵衛師は、花柳徳兵衛舞踊団の一員として芸術祭文部大臣賞受賞。定期的に古典舞踊を主とする花柳琢兵衛古典舞踊会と創作を主とする琢兵衛創作の会を主宰。花柳流花柳会理事会監事、(社)日本舞踊協会参与、杉並区文化団体連合会会長等の要職を歴任し、日本舞踊の発展と日本舞踊を通じた地域文化育成に貢献。

2 — 「和の心」を伝えるということ

1. 「型」を受け継ぐ、「心」を伝える — 「和の会」の弟子へ、孫弟子へ

「和の会」の私の弟子達は日本舞踊花柳流の「型」、師匠である私花柳和が受け継いできた「型」をまずはそのままに受け継ぐことに専念しております。受け継ぎ伝えるべきことは、踊りの型だけではなく、着物の着方、畳み方、挨拶の仕方、靴の並べ方まであらゆることが対象となります。普段は東京、那須、平塚と別々の稽古場で離れている弟子や孫弟子達が年に数回の集まりで一緒になった時、同じ空気ですとまりのある活動が展開できます。そして、また、違う年齢の子ども達でお稽古をする中で自然と「伝える」ということの基本を身につけます。年上の子は下の子に伝えたいと思うし、年下の子は年上の子をみてあんなふうになりたいと思います。

稽古場では、1日でも早く入門したら先輩となるのですけれど、たとえば3歳の方が1日前に入門して80歳の方が次の日に入門すると、3歳の子の方が先輩になるわけです。ですから3歳の子どもに「先輩だから、ほら昨日やったことを教えてあげたら」と言って、80歳の方が童心に戻って3歳の子どもから「はい」と言って教えてもらうという場面も生まれます。また、6年生の男の子が先輩として30歳近くの後輩のお兄さんに袴のたたみ方を教えるということも当然起こります。

このような光景は、学校の教育現場ではなかなか見られない場面です。「和の会」では、このように先輩から後輩へ「自分が習ったことは必ず、すぐに伝える」ということを大事にしています。「伝える」ことができてはじめて、「わかった」「できた」ということになるのだと教えています。ですから、日々の稽古場でも私が居なくても子ども達同士で伝え合っています。そして、そのような「伝え合い」の空気は常に仲間を意識することにもつながり、「人を大事にする」、「場の空気を大事にする」という姿勢を育んでいるように思えます。たとえば、順番にお稽古をする際も、自分が踊っている側になった時に、みんなが一生懸命観てくれたら自分は集中して丁寧に踊ることができるということが解りますので、おのずと、「静かに観なさい」と言わなくとも、お互いに仲間が踊りやすいように凛としたいい空気をつくって、応援しているようなつもりで観ています。



年下の先輩が年上の後輩に伝える

2. 「遊び」の中から生まれる伝え合う心と文化 ― 那須みふじ幼稚園の園児達と

那須のみふじ幼稚園に行くことが決まった時、園部先生が「和さん、心しないといけませんよ、踊りのお師匠さんとして幼稚園に赴いたら子ども達はダメになります」とおっしゃいました。稽古場の「型」を大事にするやり方をそのまま幼稚園でやってはいけないと諭してくださいました。子ども達自身の中から「踊りは楽しい」ということを引き出すためにあなたが赴くべきだ、と。子どもが本来持っている喜怒哀楽の本能的な表現を大事に、特に園部先生は「情動論」を唱えておられて、メチャクチャ踊りでもいいからその表現の中からその子の良さを引き出していくことができれば、学校や幼稚園に赴いて行う舞踊教育に意義が出てくるのではないかと、それがあなたの次の柱になるのではないかと、切々とお話しくださいました。

みふじ幼稚園では、男の子も女の子も踊るということに入る前の「それ面白いからやってみよう」という時間を大事にしてきました。お扇子のお稽古に入る前には、このお扇子はただのモノではなく、これは心の表現となる、何かに想えば何かに変わる心だということをゆっくり子ども達に話しながら触ってもらうようにしました。お扇子の箱を私は「魔法の箱」と称しまして、ガタって乱暴にやっちゃうとお扇子全部消えて無くなっちゃうよなんてことを言いますから、特にわんぱくな男の子が、そーっとそーっと大事に扱う場面は心がそのままに動きに現れている素直な姿で毎年微笑ましく見守っております。日本舞踊の中には「型」としてのお扇子の表現法があり、たとえば「雪」や「雨」、「傘」、「刀」、「手紙」などお扇子一つで様々なことを表現します。このような「型」を教える前に、子ども達とはお扇子が何かに化けたり、お扇子で何かを表現したりする遊びを十分に楽しみます。「船」とか「野球のバット」とか、子ども達は色々なものを想像して表現してくれます。日本舞踊にある「型」の表現を約束事として子ども達に紹介するのは、その後です。そうすると、子ども達はお扇子に触りたい、表現したいと自然と思うようになります。そして、お扇子が心を映す大事な表現の道具だということが解り、とても丁寧に慎重に扱うようになります。そして、このような「型」ではない情動としての表現を大事にした遊びのような活動の中にも、36年間続けるうちに子ども達の中に伝え合う「型」のようなものが生まれていることが興味深いと思っております。特に、みふじ幼稚園では初代園長先生のこだわりで立派な松羽目のあるすばらしい舞台が作られました。その舞台を拝見し、年長さんになるとあの舞台上がってお扇子のお稽古ができるという設定にしてやってきましたが、子ども達は先輩が後輩にどんどん伝えていきますので、子ども達はもうちゃんと上履きを脱いできれいに揃えて、下手の方から舞台上がって、お扇子を大事に扱い、お扇子を通して心を表現するというお稽古の流れがしっかりと受け継がれてきたのです。たとえ表面上の「型」にこだわらなくとも、受け継がれる心が育つということが伝統文化を題材とすることの強みかとも思い

ます。長く続けているもので、最近では昔の子ども達が幼稚園の先生になって戻ってきたり、親になって自分の子どもをまたみふじ幼稚園に連れてきたりすることがあり、「あっ先生、お扇子覚えてますよ」と言われると、私は自分の年齢を感じてしまいますが（笑）、これも一つの良さ、すなわち「伝統」なのかなと思っています。

このように、子ども達同士で伝え合う、繋がり合うということが自然と芽生え始めました。年下の子ども達は、年上の様子を見ながら自分達は何をするのかということが解っていて、年上の子ども達は、年下の子に伝えるということができるようになりました。お稽古の前後の着替えの場面でも、年上が年下の着物を畳んでやったり、着せてやったりする関係が自然に生まれます。間違うことも時間のかかることも多いのですが、そのような自発的なやりとりこそ、子ども達の伝え合うための知恵が生まれますので、私はできるだけ遠くから子どもなりのやり方を見守って待っています。たとえば、着物は褌が右にこないといけないので、右手、左手の順で合わせて着ますが、このやり方ができるようになったお姉ちゃんでも、向かい合って小さい子に着せると、自分の手で右と左とやるから反対になるんですね。これは多くの子どもに起こる失敗なのですけれど、そんな時、私は「上手に着せられたじゃない。すごいわね。でも、褌はどっちいっちゃったかな？」という感じで対応して、もう一度やってみましょうと伝えます。そうすると、小さい子の後ろに回って自分が着るようにして着せるお姉ちゃんも出てきます。そのような知恵を子ども達が持っていて、あんなほどね、そうすればいいのかと、私の方が教えられることが山ほどあります。子ども達のこのような伝え合いの場面に寄り添っているうちに、このような活動も一つの「遊び」でありたい、おままごとのような子ども達同士がやる行為そのものによって、いつのまにかそれが文化になるというのが面白いと考えるようになりました。

みふじ幼稚園では、シュタイナー教育を基本に子ども達を育ており、普段から縦割り保育ですので年齢の違う子ども達の間で自然に伝え合うことがあったのだと思います。また、初代、二代、三代と続き、現在は、初代園長のお孫さんである高橋明男先生が園長になられ、ますます発展的に子ども達を育む姿勢を拝見しています。

3. 「型」に遊ぶ、「型」に学ぶ ― 大学生に伝えてきたこと

一方、大学教育の場では、限られた授業回数の中で、日本舞踊の「型」に触れながら、そこに込められた「心」を伝えることに取り組んできました。様々な実践を通して、伝統文化としての日本舞踊の「型」には美と合理性があり、「型」は「堅苦しい」ものではないのだということを伝え、「型」にどう遊ぶか、「型」から何を学ぶかということを学生達に投げかけてきました。

中でも、お茶の水女子大学では舞踊教育を専門に学ぶ学生達が対象ですから、

本物の日本舞踊、本物の伝統文化に触れることから、比較する力と舞台表現の基本を身につけて欲しいと思い授業を展開してきました。「実技」の授業として設定されていますが、文化の話を抜きにしては日本舞踊を伝えることはできないので、歌詞の意味や表現の型に込められた想いやその背景を伝えることに時間をかけることもあります。もちろん、日本舞踊の動きを徹底的に身体に写すことに取り組んでもらいますが、それもやはり、動きから心を伝える表現の醍醐味を学んで欲しいと思って教えてきました。また、できる限り本物に触れて欲しいという想いから、劇場に足を運ぶように促してきました。客席から観ることはもちろん、楽屋や舞台裏に案内することもありましたし、有志を募り、国立劇場の檜の舞台で踊る体験をしてもらうこともありました。劇場では、所作台や鳴物など伝統文化特有の舞台演出について実際のものに触れながら、先人達が積み上げてきた知恵、表現の面白さを実感してもらえるよう工夫してきました。たとえ学生でも踊る側の心構えは大事に伝えたく、たとえば、楽屋が荒れているようでは、舞台は絶対に成功しない、楽屋は凜とした気持ちで心を静める場所であることも強調してきました。本物の環境の中で、伝統文化の奥深さや舞台人としての礼儀作法を学生達に伝えてきました。

和光大学でも2007年度から身体環境共生学科の専門科目「アジアの身体（日本文化と舞踊）」という名の授業を担当させていただいています。特に和光大学の授業で私が面白いと感じるのは、元気な男子学生が居てくださって「さあ、やろうか」と声を掛け合ったり、大きな声で返事をしたり、女子大とは違う活気のある温かい空気をつくってくれることです。私は踊りに大事な「空気」と「気配り」だという話をしますが、自分達が学び合う場の空気を自分達で良くしていこうとする学生達の姿は今の時代、とても貴重だと感じています。

そして、「重複履修」を認めるという制度があることも和光大学の授業の魅力です。授業内容の特性から、一度履修した学生が再度授業を受け単位を取得することができます。この制度によって、学生の間でも授業の中での「先輩」、「後輩」が生まれ、2年目、3年目の学生が初めての学生に伝える、伝え合いの中で互いに学ぶという体制が可能になっています。私が稽古場や幼稚園での実践で大事にしてきた流れが和光大学では実現しているのです。本来、たった半期の一回きりで学ぶことは限られていますので、重ねて履修してくれる学生達の深まりや広がりには興味深い展開があります。たとえば、一人の女子学生が授業を通して着物に興味を抱きまして、授業で着用する浴衣を越えて着付けができるようになり、毎週着物で登校するようになりました。そしたら、彼女が「先生、私が着物で大



和光大学の授業風景

学に来るとみんなが今日なんのお祭り？ と必ず聞くんです。着物はもともと日本人の服なのに、どうして日常化しないのだろうか？ 冬は暖かくて夏は涼しくて、こんなに機能的なのに……」と言い出しました。着物が高価なもので私達の手に届くものではないと思われてしまって、若い人が自由に着ることができなくなってしまったのはどうしてなのかと、そんな話を授業の度に重ねているうちに、彼女は4年生になり、とうとう卒業論文もそのことをテーマに取り組んで、卒業後は呉服屋さんで働いているそうです。

また、教育や保育の現場に出て行こうとする学生達には、近い将来、子ども達に踊る楽しさをどう伝えるか、日本の文化をどう伝えるか、そして、私自身が今対面している子ども達とどのようなことを実践しているのかについて語ってきました。前述したみふじ幼稚園の例などを伝えながら、子ども達には本来伝え合うことができる力があるのだということを話してきました。聖心女子大学では教育学科の学生達を対象にしていますので、このような教育に関わる話をしますと、興味を示す学生がいます。ある学生が、夏休みの前に「ちょっと外国に行きたいので先生お扇子貸してもらっていいですか」と言って来ましたので喜んで貸しました。彼女はフィリピンの幼稚園を訪ね、お扇子を使って日本の文化を紹介したそうです。訪問した幼稚園は経済的困難を抱えている家庭の子ども達を集めたところだったそうですが、彼女が見せてくれた写真に写る子ども達のきらきらした目は、私が見てきた日本の子ども達と変わらない目で嬉しく思いました。

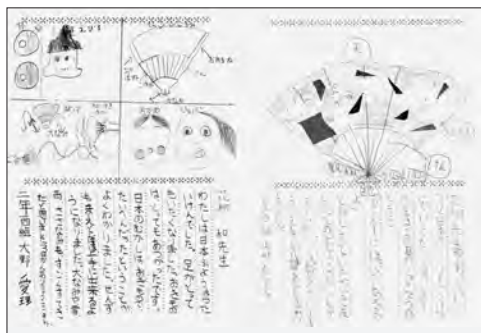
4. 地域に根付く伝統文化をめざして伝えてきたこと

(1) 「自分だけのノート」をつくる：武蔵野市土曜学校「おどり教室」の実践

私が生まれ育ち、今稽古場のある武蔵野市吉祥寺で、7年前から「土曜学校」と称しました地域教育にも関わりました。ここでもやはり、幼稚園や大学での実践同様、日本舞踊を通して子ども達には和の心を伝えたいという信念で取り組んでまいりました。

この土曜学校でも、もちろん子ども達同士の伝え合いによる学びを大事にしていますので、年上の子が年下の子の着替えを手伝ったり、やり方を伝え合ったりする光景が自然に見られるようになります。

特に、「自分だけのノート」をつくるという取り組みを大事にしてきました。「毎回、自分がこれが楽しかったとか、これは覚えておこうとか思ったことを必ずノートにまとめておいてください」と



生徒による「自分だけのノート」

伝えてきました。絵を描く子もいれば何か記号のようなものでまとめる子もいれば、文章でずっと書く子もいて、同じ教室に参加しても、みんなそれぞれ違うノートができあがるわけですが、これが本当の学びにつながるノートだと私は思っています。板書されたものを書き写すのは簡単ですが、2時間みんなでやったことの中から、自分が面白かったことや感じ取ったことを書き残すということが大事なのです。「これは世界に1つしかないノートで、宝物。みんなが大人になって外国に行った時は、このノートを持って行って伝えてちょうだいね」と話してきました。

(2) 遊ぶ心の大切さを：武蔵野市立境幼稚園との交流から

武蔵野市の市立境幼稚園には年に4回うかがいました。たった4回ではありますが、この幼稚園は、「遊び」の活動をととても重視して子ども達の自由な発想力を大事に取り組まれてきた幼稚園で、私にとっては新たな発見がありました。私は他でもやってきたように、ここでもまたお扇子を活用した実践をやったのですが、その後、展示を見に来てくださいと園長先生からお誘いを受けました。伺いましたら、子ども達が手作りで作ったお扇子が飾られてありました。紙に模様をつけるところから、骨の部分まで、全部自分達で作ってありました。子ども達が私と一緒に楽しく遊んだ「お扇子」を作りたいと自主的に言い、先生方が工夫してかなえてくださったそうです。お扇子の構造をよく理解して、頑丈に作ってありまして、^{かなめ}要のところだけは子ども達では大変なので、先生方が協力してくださったそうです。あまりに素敵で私は感動してしまい、一人一人の名前を呼んでお扇子を手に取り「これはあなたが作ったの？　じゃあこのお扇子で先生こうやって回してみるね」と使ってみせてやりました。そしたら、子ども達は本当に嬉しそうに誇らしげな顔を見せてくれました。私と子ども達がお扇子で遊び、そこからまた遊びの中でお扇子を作るという活動に発展し、子ども達が自分だけのお扇子を作ったという感動は、まさに表現そのものであり、子ども達、先生方との交流を通して、私自身楽しい時を過ごしましたし、この幼稚園に元来あった「遊び心」あふれる環境の力に強く感服いたしました。



武蔵野市境幼稚園の園児による手作り扇子

5. 特別授業「和から学ぶ」の展開

最近、単発の授業の依頼もありまして、私の母校の日本女子大学附属豊明小学校や武蔵野市の成蹊小学校では、「和から学ぶ」と題した特別授業を担当させていただきました。

ここでも、まずは、靴を脱いで揃えてから部屋に入るといった日常の礼儀や着物の着方など実際活動を通して子ども達が日本の文化に触れる機会を提供してきました。日本舞踊協会の協力を得て、着物もお扇子も200人分貸し出してもらって全員に体感してもらいました。お扇子以外にも、さらしやお面など日本舞踊の小道具も実際のものを持ち込み、子ども達に手にとって楽しんでもらいながら、紹介しました。

子ども達が授業後に残してくれた文章や絵を見ますと、武蔵野市境幼稚園の「自分だけのノート」と同様に一人一人違う表現なのですが、日本舞踊を通して、自分の宝箱に大切にしまっておきたいような何かを得てくれたのだということが伝わってきます。そして、同時に自分が楽しかったということを他の人にも伝えたいという気持ちも表れています。これらは私にとっても一生の宝物になっていくでしょう。

3——あらためて、今伝えたい「和の心」について考える

1. 子どもと環境 — 那須と東京の子どもの比較から

私は、栃木県的那須と東京に稽古場を持っているので、自然と子ども達の言動を比較するようになりまして、いくつかの違いを感じています。

まずは、「お節介やき」の度合いです。那須の子ども達の間には、必ず柔らかく温かいことばがあって、着物に着替える時など、「大丈夫？ できる？ やってあげようか？」ということばをかけるんです。風呂敷を結ぶ時も「大丈夫？ やってあげようか？」と那須の子どもはいい意味で可愛い「お節介やき」さんなんです。私は那須のご家族を観察していて、これは、親というより祖父母の代が「大丈夫？ できるかい？」と自分に日頃からかけていることばをそのまま小さい子に言っているのだと気づきました。那須は今でも大ばあちゃん、中ばあちゃんといったように何世代も一緒に生活している大家族が多いのです。ところが、東京の子は他の子どもが困っていても、見ることはするけれどことばがかけられないのです。「ちょっと手伝ってあげたら」と言わないと東京の子は動かないのです。

それから、目の表現、特に距離感の表現が違います。踊りの中で「ポーズね」と言った時に、那須の子どもはすーっと遠くを見ることができるようなんです。しかし、東京の子の目は近いところで止まってしまいます。生活環境の違いが影響していると思います。東京は、窓を開けても隣の建物の壁ですし、遠くの景色を見ることが日常の行為としてないのでしょう。ところが那須は逆に近いものがないんです（笑）。窓を開けたら向こうに山がとかあそこに雲がとか、そんな毎日ですから、舞台でも自然と遠くをすーっと見るいい目ができるんです。東京の子はなんか目がピタって止まってしまって、もっと遠くを見るんだよって言うんで

すが。

あと、足首の動きにも違いがあります。那須の子は足首が柔らかいのです。那須の子ども達は、小学校に行くのにも何キロと歩かなければなりません。しかも、コンクリートじゃなくて土の道です。東京の子は固いコンクリートの上の生活なので、踊りのポーズをしていてもなんだか硬いというか、床に対してキッと固まって立ってしまうんですね。ところが那須の子は土のクッションを感じているせいか、それこそ膝がお稽古しなくても自然といい感じに曲がるんです。これも地域性、生活環境の違いだと思っています。

それから、大人に対する話し方も随分違います。たとえば、那須の子は、来週運動会だからお稽古をお休みするというを確認する時、「先生、あのね、来週運動会だから休み」、「そうなの、じゃあ休みね、運動会がんばっていらっシャい」といった自然な子どもらしい会話になりますが、東京では時に怖いぐらいのことが起ります。小学校1年生の子が、「先生、来週ですが、運動会のためお休みさせていただきます」と言うのです。これは明らかに親が先生に失礼がないようにこのように言いなさいよとことばを受け渡してしまったのです。ことばを教えこまれたことによって、表情も身体も硬直してしまっています。ことばを先に教え込むほど怖いものはないと私は思っております。子どもは、それぞれの年頃でちゃんと適したことば使いをするようになります。「ママが」「お母さんが」と言っていた子どもが、ある時「母が」と言い出すように、成長の中で自然とそう言ってみたい時期がきて言うようになるわけで、それを小学1年生の子が「母が」なんて言い出すと、そこにその子どもの心があるのだろうか、どうして先にノウハウを教え込んでしまうのだろうか疑問に感じてしまいます。

2. 心とことばと動きと…… ― 父を想う

このように、「子どものことばと環境の力」などと考えておりますと、最近、あらためて、私自身の父のことを想うようになりました。父は、西原慶一と言いまして、成蹊小学校国語教師や日本女子大学附属豊明小学校主事（校長）をしておりました。『実践国語』という月刊誌を作成しておりまして、毎月先生方が自宅に集まって夜遅くまで勉強会が続いていたのを記憶しております。

今あらためて父が残してくれた文章を読むと、父の国語教育者の立場からの提言と私が今伝えたいと考えていることがとても近いと感じるのです。先ほどの話のように、私はことばを大人が子どもに教え込むことに危機感を抱いておりますが、父も、国語教育という一見最もことばを正し指導する役割を担うような立場にあって、同じようなことを考えていたようです。父の書いた本に次のような文章があります。

ことばは、はじめから練習的ではなく、学習的ではなく、生活からきりはな

されて、独立しているものではない。ことばの生活の場面々々の必要から、興味から、総合的にうまれる。ことばは習うもの、教えられるものであるよりもさきに、生活の習慣であり、態度であり、技術である⁴⁾。

私の場合は踊りですから、この考えに身体のことばとしての「動き」や「行動」という視点が加わりますが、同じように動きだけを教え込む、行動だけを強制することには意味がないと考えております。たとえば、お辞儀一つにしても、頭を下げるという動作だけではご挨拶にはならず、そこに「誰に」「何を」伝えるのかという実際の想いがなければなりません。相手をしっかり見て、「よろしくお願いします」や「ありがとうございました」のことばを伝えるために頭を下げ、顔をあげて相手の目を再度見るところまでがご挨拶であり、そのように、心とことばと行動が一致してはじめて相手に届くのだと考えています。ですから、伝えたい「想い」や「気持ち」など「心」がない動きは、教え込まれただけのことばと同様に、ただの動作であって踊りではないのだと考えています。プロの舞踊家でも、「いい踊り」と「巧い踊り」をする人がいて、それは随分違います。技術があっても、心に響かない人もいて、それは伝えようとする心があるかないかの差であろうと感じます。ですから、子ども達や学生達に伝える時にも、振りや型をただの動作として受け取っては「踊り」にはならない、日本舞踊の場合は、特に歌詞があって、その表現を解釈して振りに想いを入れて動いて初めて踊りになるということを大事に伝えています。振りや型は伝統芸能の中ではとても重要ですが、だからこそ、そこに込められた言葉や想いを大切に伝え、踊る本人の表現として振りや型が現れなければ、日本舞踊の表現にはならないのです。このような考え方に基づいていますので、「振りを間違える」ということについても私の視点は、心とことば（歌詞）と動きが一致しているかということにあります。心とことばと動きの表現に矛盾がなければ、単に右足出すのが左足出しちゃったというのはあまり重要な間違いとはとらえません。ただ、歌詞が「桜」と言っていて桜を見なければならないのに、「川」を見ちゃったら、それは大きな間違いだと伝えます。

そして、「間違えないように」ということばも使いません。自転車で「右に曲がらないで」と言うと、子どもは右に曲がってしまいます。ことばがけ一つで子ども達は萎縮してしまうでしょう。父は国語の指導者が「きちっと読みなさい、間違えないで読みなさい」とばかり言うと、子どもは読めなくなってしまう。単に正確であるということだけを求めると、「活力」がなくなると強調しておりました。きちんと修練していく時こそ活力を持って取り組まないと仕上がらないし、

4) 西原慶一（1954）『子どもと環境』新思潮社、p.5。

最も大事なのは、文章を読むということが「楽しい」のだ、この文章はこんなにも面白いのだということを伝えることだと論じています。

父は、ことばの育ちに関して、「ことばは環境から生まれ、環境で育ち、さらに、環境を創っていく」⁵⁾と言っています。そして、社会環境について憂いつつも、「社会環境は、固定した、変えがたいものではない。おとなひとりの心の持ちかた、ことばづかい一つを変えるだけでも、環境はかわるというほどのものである」と環境としての私達大人の役割について論じています。

私は父の勤務する学校に通いましたので、自身の父が「先生」として存在していることに対する拒否反応のようなものがあり、父の話をしっかり聞いていなかったもので、残念ながら自分では覚えていないのですが、幸い、父は文章を残してくれていますので、それらを頼りに父のことばに出逢い、共感することが多く感動しています。もし、今、父に会って話すことができるのなら、国語教育と舞踊と分野は違ってもこんなに共通することもあるのねと、話が盛り上がるだろうと思います。この歳になり、自分が大事にしてきたこと、残りの人生で伝えていきたいことがようやく見えてきた今、父のことばに戻り、心から父に会いたいと願ってしまうのも、私自身が父母に家族に大切に育んでもらった証であるとも感じています。

3. 子どもが感性豊かに表現できる環境を

ある日のこと、中央線の電車に乗った時、4歳くらいの子が窓の外を見ていました。お母さんは横で座っていて、私はその前に立っていました。すると、その子が「お母さんお母さん、真っ赤なきれいな太陽が！」と言い出しました。中央線は高架線がありますからすごくきれいに見えるんですね。私もその前から、「ああ、きれい」と思っていましたので、この子も気づいたんだなって嬉しくなりましたが、お母さんは「そう」って振り向きもしないまま、ずっと携帯を見ていました。こんな状況に出逢うと、このような大人の態度が、子どもの感情を押し殺してしまうのではないかと不安に感じます。ちょっとだけ携帯から目はずして、「あら、まあ、本当にきれいねえ」と言うだけで、その子にとっては、「ママが同感してくれた」あの夕日は一生忘れない記憶となり、身体に宿っていくものです。そうして心に宿っていたならば、踊りの中で、「ここは今こういう状況で、あそこに真っ赤な夕日があってそれを見とれている子なのよ」と言った場面設定を提示された時に、子どもは自分の体験を表現に変えることができるのです。様々な出来事に触れたたくさんの経験をする中で、子ども自身が心を震わせ、その思い出がイメージやことばとして残っていれば、それらが表現の素になるのです。

5) 西原慶一、前掲書、p.17。

宮崎駿^{はやお}さんが創造的な仕事をなさるのは皆さんご承知のことと思いますが、テレビのインタビューで「僕は新しい次の題材を考えようと思う時に、広い野原で大の字になって何かいいものないかなあと考えることがあって、その時の感情は、僕が少年時代に高い山の上に行って、今日はどんな蝶々が飛んでくるかなあと思っていたときのものとまるで同じなのです」と語っておられました。子どもの時に持った感情は大人になった時に呼び戻されるのです。また、随分前から、無表情・無感動の赤ちゃん、いわゆる「サイレントベイビー」が増えていることが話題になっていますが、テレビ番組である実験が紹介されていました。オムツを替える時に、お母さんが表情豊かにあやしながら接すると赤ちゃんも赤ちゃんらしく表情豊かに笑うのですが、無表情でオムツを替えると赤ちゃんの表情も段々と硬直していった笑顔がなくなってしまうのです。とても怖いことだと思います。

このような話を合わせて考えると、電車の中で「そう」と言ってメールを見ていたお母さんの子どもが、段々自分の感情をことばに出さなくなっていき、どんなにきれいな景色に出逢っても感動しない大人に成長していくのではないかと、環境としての大人の責任を痛感いたします。環境としてそこに居る大人の対応が、子どものあふれるような感情を消し、ことばも止め、表情も殺してしまうことがあるのです。子どもが感情豊かに自分を表現できる環境をどのようにして提供するかということは、私達大人にとって大事な課題であると考えています。

大人から一方的に教え込むのではなくて、子ども自身が感性豊かに自分を表現し、創造することを楽しむことができるような体験を支えるために、大人がやるべきことは、子どもと一緒に「遊ぶ」こと、子どものいい遊び相手になってやることだろうと私は考えています。父の本に、このような文を見つけました。

コドモトアソベということは、わたくしの口ぐせである。「子どもの直接経験の場に立ちあう」ことは、小学校教師の第一の覚悟でなくてはならない。いや、「立ちあう」というような指導的な態度ではなく、教師のがわでは、子どもと共通の経験をもち、共通の話題をもつ、現場で苦楽を共にするというような、かけひきのない態度にあらわれるわけである。家庭や学校や社会での、いろいろなシゴトもさることながら、まず第一に、コドモトアソベである。(中略) なんでも、しんから、子どものよいあそびあいてになれるというのがじまんの、小学校教師でありたい⁶⁾。

父も教育者という立場から子どもの遊び相手であることに徹していたのだと知ると、私も、これからも、日本舞踊という和の心が詰まった世界の中で子ども達

6) 西原慶一、前掲書、p.17。

と一緒にのびのびと遊び続けたいと思うのです。

4 ― おわりに ― 出逢いとつながりに感謝を

本日は、話をする機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

日本の文化は、「いま、ここで」この時、この空間で伝えることが最も大事にされていると思っています。舞台もまさに、「いま、ここで」なので、その一瞬に伝えられるものが全てとなります。「いのち」を共有するということかもしれません。極端な話ですが、私は、明日は死ぬかもしれないいつも思って、今日、今を大事に、そのときを共有できる人に伝えていきたいと思っています。ですから、今日この場を共有してくださったみなさまに感謝申し上げます。

そして、今回の講演を準備する中で、私自身が様々な方との出逢いに恵まれ、その出逢いがまた新たな出逢いにつながり、今ここにあることをあらためて実感することができました。人は自分一人では成長できず、常に他の誰かに出逢うことによってのみ成長するのだと思っています。私をこれまで育んでくださった全ての方々にこの場をお借りして感謝申し上げたいと思います。

〔はなやぎ かず〕